

はじめに

日中戦争以降、多くの画家達が志願し、または陸海軍に委嘱されて従軍し、戦地を取材して作品を制作したが、その作品群は一般には「戦争画」と呼ばれている。戦後、それらの作品はGHQに戦争宣伝のための絵画であると認識され、接收、昭和45年153点が無期限貸与の形で東京国立近代美術館に返還、収蔵されている。だが、その作品群は昭和52年、50点近くを一斉公開する予定であったが、急遽、「近隣諸国の国民感情に配慮する」という理由で、その企画は見送られた。それ以降、「戦争画」は一斉公開されることなく、戦後、長い間タブー視されてきた。

筆者も数点の「戦争画」を見た経験があったが、戦場の様子を写實的に描いた作品であり、「戦時中、戦意昂揚の為に描かされたのだな。戦時中は軍部の統制が厳しくて、画家たちも好きな絵が描けなかったのだろうな」くらいの認識でしかなかった。

それが、昨年、姫路市立美術館で行われた企画展「美術と戦争展」において、小早川秋聲作の「國之楯」という作品に接し、それまでの考えに疑問を感じた。

その作品には、真っ黒な背景に、一人の戦死した兵士が横たわっており、顔には出征時に友人たちから贈られたであろう、激励の言葉の書かれた日の丸が掛けられている。一見、凄惨で、またその兵士の死を悼む印象の画面であった。その印象から「戦争画は戦争を賞賛する目的で描かれたものとばかり言えない。こんな悲惨な印象を与える作品が、あの当時、存在できたのか」という驚きすら感じたのだった。

それからというもの、その作品を制作した小早川秋聲という日本画家に興味を持ち、その他の作品や、その生き方、さらに、従軍していったその他の画家達について調べていこうと思ったのが、今回の研究の動機である。

戦後、長い間、日本史上はじめての敗戦というトラウマとアメリカの占領政策、ソ連と中国の宣伝攻勢から、「戦争」というものは「絶対悪」で、それについて知ろうとする事や、語る事、考える事すらも「悪」と言った風潮が続き、悪い「戦争」が描かれているから、「戦争画」は「悪」といった、単純な二元論的な決めつけが行われてきた。

そして、筆者はそのような風潮に疑問を感じていた。

今回の研究において、小早川秋聲をはじめ、従軍した画家達の生き様や作品を通し、「戦争画」を単なる「戦争宣伝」と決めつけて見るのではなく、あの時代に描かれた美術作品として見直してみる事、従軍した画家たちも、あの時代を懸命に生きていた一人一人の人間であったと検証して見る事、これらがこの研究の目的である。

第一章 従軍画家について

1 節 昭和初期からの社会状況と戦局

(1) 満州事変勃発

昭和という時代は、大正12年の関東大震災に始まり、翌、大正13年は、アメリカでの排日移民法制定、大正14年、治安維持法制定などと、暗い事件の続く中での始まりであった。

昭和2年の金融恐慌、そして、昭和4年10月、ウォール街での株の大暴落から始まった世界大恐慌が波及しての不景気、東北、九州での農村部の不作、凶作など、大変な状況の連続であり、国民の大半は、苦しい生活状況にあった。

農業国であった日本の明治初期の人口は3,000万人であり、その当時は食糧が自給できていた。しかし、昭和初期にはすでに人口6,000万人を突破、食糧や資源は不足し、明治時代に始まった海外への移民も、アメリカでの排日移民法、排日土地法が成立するなど、困難な状況だった。当時の日本は新しい生活圏の拡大に迫られており、「満蒙は帝国の生命線」と松岡洋右が発言したのもこの頃であった。

そのような状況下、関東軍参謀、石原完爾をはじめ、関東軍上層部は謀略により、昭和6年、満州事変を起こし、翌年、「満州国」を建国。「五族共和」をうたいながらも、事実上、日本の植民地とした。

その後、国内においても、5・15事件、2・26事件など、体制に不満を持った陸海軍の将校たちが、「昭和維新」を呼号し、テロやクーデター未遂を引き起こした。その背景には、単純に軍部の独走があっただけではなく、国内の長い不景気、農村の疲弊（全人口の7割）を背景とした国民の不満が存在していた。農民の子弟たちが、徴兵制度下の陸軍には多数入隊しており、その悲惨な状況を聞き及び、生活を共にしていた若手陸軍将校たちが、どのような感情と、考えを持ったかは想像できる。

「昭和天皇独白録」で、昭和天皇は、「あの戦争の遠因は人種差別問題であり、近因は経済問題だった」と述懐している。

眼を世界に向けてみると、世界大恐慌を引き金に、植民地を持つ国々は、本国の経済を植民地とリンクさせ、経済を地域的にブロック化することによって自国の経済を守った。

第一次世界大戦に敗れ、ベルサイユ条約によって莫大な賠償金を科されたドイツは、主婦が買い物に行くのに乳母車一杯に札束を持っていった等のエピソードで語られるほどのハイパーインフレーションに襲われ、国民は苦しみにあえいでいた。その国民の不満の中で勢力を得た国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）は、政権を獲得、1933年（昭和8年）、ヒトラーは首相に就任。ムッソリーニ率いるファシスト党が政権を獲得したイタリアも、1934年（昭和9年）エチオピアに侵攻するなど、「持たざる国の生存圏の拡大」が始まった時代であった。また、中国では1931年（昭和6年）に毛沢東が党主席に就任するなど、まだ、小さいながらも後の中国を決定していく新しい動きが見られた。

日本、ドイツ、イタリアなど、のちに枢軸国と呼ばれた国に対し、イギリス、アメリカ、フランス、オランダなど、のちに連合国と呼ばれた国々は、世界各地に植民地を持つ国々であり、当時の戦略物資であった「石油」を持つ国々であった。

この時期は確かに、大正時代の好景気と自由な世相からは遠い、不況が続き、国内での引き締めも始まり、暗い時代のように思われるが、日々の生活を生きる庶民にとっては、やはり、普段の生活の中で、苦しいながらも楽しみを見つけ、懸命に生きていた時代と言えるだろう。プロ野球球団が設立されたり、子供たちの間には「のらくろ」や「黄金バット」が人気であった。まだ、排日移民法が成立したとはいえ、ヘレン・ケラーやベイブルース、チャップリン等が来日するなど、日米関係は模索を続けていた時期であった。

(2) 日中戦争始まる

昭和6年の満州事変以来、諸外国の眼は満州に向けられた。陸軍の一部の者たちは、その眼をそらすため、翌年、上海において武力を行使した。(上海事変)しかし、国際社会は「満州国」を承認せず、昭和8年、日本は国際連盟を脱退した。

また、昭和8年、陸軍は熱河作戦において長城線を越えるなど、その行動は、長城線以南を漢民族の領域と考えていた当時の中華民国政府に警戒感を懐かせた。大正4年の対支二十一ヶ条要求以来、中国国民には反日、侮日の空気が拡大しており、日本製品の不買運動をはじめ各地でデモ、暴動が起こっていたが、さらに、その運動が激化した。それは、昭和12年、日本人居留民の虐殺(通州事件)にまで発展していった。

日中間の緊張は続き、昭和12年の盧溝橋事件(北京近郊の盧溝橋において日支両軍が軍事衝突を起こした事件)をきっかけに、ついに、日中戦争(支那事変)が始まった。日本は国力のかなりの部分を大陸での戦争につき込み、昭和20年の敗戦時には百万人に及ぶ将兵と莫大な兵器、資材を中国大陸につき込んでいた。陸軍は当初、半年で戦争を解決するつもりでいたが、南京攻略後も、国民党政府は首都を重慶に移し、国民党政府との戦闘は続いた。その後、近衛首相が「南京政府を相手とせず」との声明を発表するなど、停戦のめどはつかなかった。

その後も、ナチスドイツのヨーロッパでの戦勝に乗じて、昭和15年9月、北部仏印に進出、翌年7月には南部仏印に進駐するなど、日米関係は悪化の一途を辿っていった。

国内では、昭和13年、国家総動員法が成立、綿製品、革製品の供給禁止、翌14年には、米穀配給統制法が公布され、昭和15年7月には奢侈品の製造販売も制限された。物資の多くは代用品に変わっていくなど社会全般で統制がすすめられていった。また、政治の世界では、昭和15年2月、衆議院の斉藤隆夫議員が、「名目のない長期戦が国民を苦しめている」と支那事変に対する批判演説を行ったが、大勢では戦争の拡大が承認され、大政翼賛会が結成、着々と戦時体制が整えられていった。

また、昭和15年は、「皇紀二千六百年記念」のため、各地で奉祝の式典が行われた。そして、アジアで初の東京オリンピックも開催を予定されていたが、各国の不参加の表明と

軍部の反対により、取りやめとなった。

ヨーロッパに眼を向けると、ドイツは、1938年3月、オーストリアを併合、9月にはミュンヘン会議によって、チェコのスデーデン地方を割譲させた。この時の、イギリス首相、チェンバレンの宥和政策はヒトラーの判断を誤らせる事となり、その後、ヒトラーにポーランド侵攻を決断させることとなった。

1936年5月、イタリアはエチオピアを併合、1939年3月、スペイン内戦でドイツに支援されたフランコ将軍が内戦に勝利するなど、全体主義国家が勢力を伸ばした時期であった。

そして、1939年8月、ドイツは、ソビエト連邦と独ソ不可侵条約を結び、9月にはポーランドに侵攻。ポーランド領土をソビエト連邦と分割する。それに対し、イギリス、フランスはドイツに対し、宣戦し、第二次世界大戦が勃発した。

(3) 太平洋戦争の開戦と敗戦

昭和16年12月8日、日本の真珠湾への攻撃により、ついにアメリカとの戦端が開かれ、太平洋戦争が始まった。この戦争は、勝算があつて始めた戦争ではなく、日本軍の南部仏印への進駐を見たアメリカの石油の禁輸政策によって、数年もしないうちに、ヴィンソンプランによる圧倒的なアメリカの戦力の拡充と、当時700万トンあった石油のストックが2年程度で尽き、連合艦隊が動けなくなってしまうことを恐れ、陸海軍とも、清水の舞台から飛び降りる決意で戦端を開いたものであった。

ここまで、何度も日米間では、交渉が持たれたが、アメリカ側は中国大陸からの撤兵を求め、それを呑む事は、日本として、満州事変以来の政策をすべて否定しなければならない状況であり、結局、交渉は決裂せざるを得なかった。

しかし、開戦後は、緒戦の大勝にかまけ、どこで講和を結ぶかなど、終戦に向けての用意はほとんど為されず、結局、国力以上に戦域を広げすぎ、戦前から用意周到に、戦争準備を行ってきたアメリカの前に敗れてしまった。

国民感情では、太平洋戦争が始まった当時、「長く日本やアジアに対し、人種差別、経済的な搾取を行ってきた驕敵米英によくぞ宣戦してくれた」といったものが大半であった。常識的に「アメリカ相手の戦争では大変な事になる。」と考えた人々も数多くいたが、大恐慌以来の不景気と、国内外の閉塞状況を長く感じていた国民はどこかにその解決と打開をこのアメリカに対する戦争に求めている部分があった。しかも、緒戦は欧米列国の植民地軍に大勝した事もあり、多くの国民はその勝利に沸いた。そして、戦局も、昭和18年の末までは、何とか中部太平洋において、アメリカ軍の侵攻を抑え、戦っている状況であった。

日中戦争（支那事変）が始まって以降、国民の生活は一部の軍需成金を除けば長い戦争に圧迫され、物資や食料が欠乏していた。昭和18年3月、金属回収が始まり、同年6月、衣料簡素化のため、もんぺと国民服が標準服とされた。当時の映画は「ハワイ・マレーシア沖海戦」「姿三四郎」「無法松の一生」などが大ヒットしていた。そして、同年10月、

学徒出陣が始まった。さらに、昭和19年になると、都市部では危機的に食料が欠乏しはじめた。

昭和19年6月、マリアナ沖海戦が行われ、敗北。これにより、サイパンをはじめ、マリアナ諸島が陥落。このため、都市部への空襲が懸念され、学童疎開が始まった。国内においては、以上のように国民の大半は厳しい生活に耐えていたが、依然、空襲もなく、国民は、明治以来の「戦争とは国外で戦われるもの」といった印象を持っていた。

また、マリアナ沖海戦によって、日本海軍は空母機動部隊を失い、まったく、対米戦勝の望みを失ってしまった。この敗戦により、国内では東条内閣が辞任。しかし、政府は国民に真実を知らせず、今後、1年以上にわたって、無謀な戦争を継続した。この後、フィリピンでの戦いで陸海軍航空隊は「体当たり攻撃」さえ行わなければならないほど、通常の戦闘ができなくなってしまっていた。

そして、同年11月、サイパン島テニアン基地を拠点としたB29の日本本土への本格的な空爆がはじまった。

さらに、米海軍潜水艦の活動によって多くの輸送船が沈められていったため、南方占領地域からの石油やゴム、ボーキサイト、亜鉛などの戦略物資が輸送できず、内地では兵器等の生産、航空機の訓練が出来なくなっていった。スマトラ島パレンバンなどの油田では、せっかく採掘した石油を運ぶタンカーがないために、石油を現地で焼却していたほどであった。同年10月末にはフィリピン沖での海戦に敗れ、南方での制海権を完全に失って以降、南方占領地域からの物資はまったく日本本土には届かなくなった。

昭和20年2月からは、瀬戸内海や関門海峡など、日本近海すらもB29による機雷封鎖によって国内の船舶輸送に危険を伴う状況になっていった。同年3月、硫黄島の陥落、艦載機によるB29の護衛が可能になると共に、中小都市へ攻撃がはじめられた。同年6月、沖縄が陥落し、北海道を除く全国各地が艦載機の攻撃にさらされ、国土は恐るべき速さで焦土化していった。すでに当時の日本陸海軍の戦力は枯渇し、軍部と政府は「一億特攻」を呼号したが、連合軍の上陸が予想される九十九里浜や南九州の陣地の築城も進まず、急遽動員した老兵達に支給する小銃等の武器すら不足していた。そして、8月、広島、長崎への原爆の投下、連合国に対し和平の仲介を期待していたソ連が参戦するに至り、日本はポツダム宣言を受諾、敗戦をむかえるに至った。

ヨーロッパでの様子を見てみると、ナチスドイツは1939年9月のポーランド侵攻以来、デンマーク、ベルギー、オランダと席卷し、1940年6月にはパリが陥落、ヨーロッパの大半は独軍の占領下となった。1941年6月、ソビエト連邦に侵攻した独軍は破竹の勢いを示し、モスクワは陥落寸前であった。

しかし、様々な理由で独軍は作戦上の齟齬をきたし、モスクワは持ちこたえ、赤軍の反攻が始まった。1943年1月にはスターリングラードで敗北。その後、東部前線での戦況の回復はなかった。

そして、同年、独伊軍は北アフリカで連合国に敗北、さらにイタリアが降伏。1944年6月、連合国はノルマンディーでの上陸作戦を行った。最終的に、ドイツは日本にも勝る

投弾量の連合軍側の空爆と、赤軍と連合軍の侵攻による地上戦で、国中は荒廃し、800万人以上ともいわれる戦死者を出した。4月末、赤軍のベルリン占領により、5月3日、ドイツは降伏した。

(表1) 満州事変以降、敗戦までの主な出来事と物価、社会情勢

年 代	政治・軍事・海外	経済・物価	社会の出来事
1931 昭和 6 年	エンパイアステートビル完成 リンドバーグ夫妻来日 満州事変起こる 毛沢東主席に就任	昭和 6 年度予算 14 億 4852 万円 ナショナル製ラジオ受信機 45 円 ロート目薬 20 銭 理髪料 50 銭	「のらくろ」「黄金バット」大人気 古賀政男「酒は泪か溜息か」大ヒット 大阪城天守閣復活 米大リーグチーム来日 北海道、東北飢饉
1932 昭和 7 年	上海事変勃発 満州国成立 5・15 事件起こる チャップリン来日 米、大統領選、ルーズベルト圧勝	アイシャドー一色 1 円 円安で 1 円 = 20 ドル (年平均は 28 ドル) 円タク市内は 50 銭 映画入場料 50 銭	ロス五輪南部忠平三段跳び金メダル 欠食児童全国で 20 万人 映画「ターザン」大ヒット 白木屋火災死者 14 名
1933 昭和 8 年	ヒトラー独首相就任 国際連盟脱退 ドイツ国会議事堂炎上 ナチス 660 全議席獲得 皇太子明仁誕生	ビスコー箱 10 銭 胃薬わかもと 50 銭 パイロット万年筆 5 円 廉価版レコード 80 銭	三陸大津波死者二万人 小林多喜二拷問死 「東京音頭」大流行 前畑秀子 400 m 平泳ぎで世界新記録
1934 昭和 9 年	ヒトラー、全権を掌握 国際連盟ソ連加盟承認 中国共産党長征を開始 伊、エチオピア侵攻	大学卒の初任給 70 円 満州事変以来の軍需景気 エビスビール 34 銭 10 銭バー人気	室戸台風死者、行方不明 3200 人以上 九州地方で干ばつ 東北地方冷夏で凶作 満州移民開始
1935 昭和 10 年	米、アリゾナ州排日土地法提出 ヒトラー再軍備を宣言 ロンドン軍縮会議	* 1	忠犬ハチ公死亡 満州国皇帝溥儀来日 出口王仁三郎ら大本教弾圧
1936 昭和 11 年	2・26 事件 イタリア、エチオピア併合 スペイン内戦 ベルリンオリンピック 日独伊防共協定成立	洋梨 1 個 10 ~ 20 銭 タバコ「光」10 銭「敷島」20 銭 講談社の絵本 35 銭 南洋拓殖株式会社創立	双葉山の 69 連勝始まる 阿部定事件 日本隊ヒマラヤ初登頂 D51 蒸気機関車完成
1937 昭和 12 年	独軍、ゲルニカを爆撃	戦艦大和建造費 1 億 6	ヘレンケラー初来日

年	パリ万博開催 スターリン赤軍を肅正 盧溝橋事件、日中戦争 始まる ヒンデンプルグ号炎上 上海、南京占領	300万円 世界的鉄鋼不足で鉄価 1 屯 90 円が 200 円に 暴騰 サントリー角瓶 8 円 小型カメラミゼット 10 円	ひとのみち教団弾圧、教 祖幹部逮捕 後楽園球場開場 プロ野球タイガース優勝
1938 昭和 13 年	パリで国際シュールレ アリスム展開催 独、オーストリア併合 独、ズデーテンの割譲 独、水晶の夜事件	マッチ 100 本入 12 銭 有名スターの月給 片岡千恵蔵 6200 円 板東妻三郎 5500 円 帝大出身者の官僚が 3 5 歳で 150 円程度	女優の岡田嘉子、杉本良 吉とソ連に亡命 国家総動員法成立 阪神大水害 933 人死亡 必需物資代用品展覧会 吉本興業「笑わし隊」を 戦地へ派遣
1939 昭和 14 年	スペイン内戦終結 ノモンハン事変起こる 独、ポーランド侵攻 第 2 次世界大戦始まる 独空軍、英本土空襲 蒋介石北伐を命令	インフレ抑制のため 「9.18 停止令」決定 東京の小売物価、前年 度より 20% 上昇 清酒銘柄品一升 2 円 20 銭	双葉山 69 連勝 ゼロ戦試験飛行 米穀配給統制法公布 第一回聖戦美術展開催 白米禁止令公布
1940 昭和 15 年	汪兆銘、南京政府樹立 独軍、パリ無血入城 独空軍ロンドン爆撃 日独伊三国同盟締結 ルーズベルト三選する	* 2	マッチの製造配給の統制 米味噌等の切符制導入 奢侈品禁止令 (7,7 禁令) 紀元二千六百年記念式典
1941 昭和 16 年	独、対ソ戦始まる 南部仏印進駐 ゾルゲ事件 太平洋戦争始まる	グリコ 10 粒入り 5 銭 タバコ金鵝 9 銭 簡易生命保険の契約高 が百億円を突破 日劇の入場料 80 銭	「新太閤記」「智恵子抄」 ベストセラーになる 李香蘭大人気 映画会社を 10 社から 3 社に統合
1942 昭和 17 年	シンガポール陥落 マニラ陥落 ミッドウェイ海戦敗北 米、日系人の強制収容 連合軍、アフリカ上陸	宇津救命丸 1 袋 30 銭 タバコ桜 25 銭 メリヤスシャツ 3 円 資生堂クリーム 1 円 67 銭	関門トンネル開通 「ハワイマレー沖海戦」 大ヒット
1943 昭和 18 年	スターリングラードで 独軍降伏 アッツ島玉砕 イタリア無条件降伏 学徒出陣はじまる	うどん、そば 13 銭 駅弁 40 銭 米 1 升公定価格 50 銭 闇値では 3 円	通天閣が炎上 食糧事情が逼迫 アニメ「くもとちゅうり っぷ」公開 上野動物園で動物の処分

1944 昭和 19 年	インパール作戦開始 印度政庁ガンジー釈放 連合軍ローマ解放、ノ ルマンディール作戦開始 マリアナ沖海戦 サイパン陥落 連合軍パリ解放 B 2 9による空襲激化	国鉄運賃東京ー大阪間 11 円 50 銭 セルロイド万年筆 3 円 買い出しの禁止通達 野菜等の闇値高騰 雑炊一杯 30 銭 雑誌は古紙との引き替 え販売になる	スイカ、メロン等作付け 禁止 宝塚歌劇団最後の公演 東京に「国民酒場」開設 噴火により昭和山誕生 学童疎開始まる プロ野球最後の試合 特攻はじまる
1945 昭和 20 年 (8月まで)	東京大空襲 ドイツ敗戦 沖縄陥落 広島、長崎に原爆投下 ソビエト参戦 敗戦	タバコ配給一日三本 軍需インフレで二百円 紙幣発行 ガス料金四割値上げ 食糧配給 1 日 2 合 1 勺 (東京府)	三河大地震死者 1961 名 米軍、機雷を投下し、日 本周辺の海上封鎖 国民勤労働員令発令 長距離乗車券販売制限 外食券食堂実施

(「日録 20 世紀」 1931 年～1945 年を参考とし、表としてまとめた。なお、* 1,
* 2 は資料がないため不明)

第2節 美術界の動き

(1) 帝国美術院改組

美術界は戦争中、「物資が統制され、画家達は召集され美術界は衰えた」と思われがちだが、調べていく内に意外と活況を呈していた事、また、美術界に対して軍部及び政府が戦争遂行のため、案外協力的であった事が垣間見られた。

まず、勘違いを起こしやすいのは、物資が「統制」されていたという事は、誰もが街で簡単に購入できない反面、物資を「統制」しているが故に、手に入れる資格を持つ者達にとっては、逆に安定した入手ができたという事実だ。

「召集」されたのは、普通、20歳時の徴兵検査で甲種合格した者だった。もしくは、事変のために新たな兵力を動員する際、予備役兵や後備兵から再度召集された40歳以下の者であった。しかし、30歳前後の者の召集は、昭和19年以降、戦局が極めて悪化した頃からであり、画家として認められていた者は、その技能を生かし軍属として働くなどすれば召集されなかった。また、著名な画家たちは、とっくの昔に40歳を超えていたのだ。あの時代、戦地で戦った者の大半は、20歳から後半の数年間の世代だったのだ。

大正時代、第一次世界大戦での好景気もあり、多くの洋画家たちが、パリに遊学するなど、自由な雰囲気的美術界であった。しかし、関東大震災以来の不況、労働運動や社会運動の勃興とその弾圧など、社会状況の悪化により、その自由でのんきな雰囲気が、だんだんと窮屈なものに変化していった。

大正時代末に始まった、プロレタリア美術運動も、大正14年の普通選挙法と抱き合わせで成立した治安維持法公布後、特高警察等に弾圧され、ほとんど壊滅状態になってしまった。さらに、昭和6年に始まった満州事変以来、国内では、国粹主義的な雰囲気が高まっていった。

昭和10年5月28日、松田源治文部大臣が帝国美術院改組の声明を出した。そして、これまでの帝国美術院を解消し、新たな会員50名の決定、新たな規程の発表が行われた。目的は、それまで、在野の美術団体に属していた著名な作家たちを、官展に取り込み、美術界への統制を強めようとしたのである。

それによる、美術界の反応は、決して良いものではなかった。文展以来、長年にわたって認められた無鑑査出品の特権が失われた者や、これまで官展に対して、アカデミックだと批判をしていた者が、新たに帝院の会員になった事への反発、また、その改組が、美術界全体に何ら意見を求めず、抜き打ち的に行われた事に対する反発などで、美術界は混乱を呈した。さらに、美術界では、それについて様々な意見が出されたが、その改組は、「癌を除くつもりで、新たな癌を作った」等、失敗であったと批判する意見が大半であった。

文部省は、「日本美術の発達、美術界の挙国一致、美術による日本精神の高揚、日本精神に反する美術の排撃」を、改組の目的とし、美術界への統制を強めていったのだが、それに対し、在野の各美術団体は批判の声明を出し、帝展への作品の不出品、新しい美術団

体の結成等が行われた。そして、その影響は翌11年まで続いた。

ただ、美術界の混乱の本質は、表向きには「美術界への政府の統制の反対」であったが、内実は、作家たちの地位や特権への執着と確執であり、その改組の背後では、政界と結んだ様々な美術家たちの暗躍があった。（「美術」昭和10年7月号2～42p）

参考 当時の画家と政治家のつながりを見立てたもの

表 立 見 界 政 家 術 美													
結城素明	安井曾太郎	南 薫造	橋本關雪	川合玉堂	横山大觀	香取秀眞	藤島武二	岡田三郎助	和田英作	中村不折	石井柏亭	齊藤與里	朝倉文夫
...
鈴木喜三郎	町田忠治	山崎達之輔	中野正剛	若槻禮次郎	伊澤多喜男	小泉策太郎	床次竹次郎	岡崎邦輔	松田源次	加藤政之助	秋田 清	尾崎行雄	安達謙蔵

(図1) 「美術」昭和10年7月号37p

この時期から、国粹主義的思潮の高まるなか、洋画の題材が国粹主義的なものになる傾向が強まっていった。ただ、その後も海外のシュールリアリズムやキュビズムの作品が紹介されたり、展覧会が開かれるなど、前衛的活動も盛んであった。

そして、昭和12年7月、日中戦争が勃発すると、献納画運動や献金が盛んに行われるようになった。また、陸海軍に従軍する画家達も増加しはじめ、各地で従軍作品展が頻繁に行われるようになった。

(2) 日中戦争以降

昭和13年7月、大日本陸軍従軍画家協会が設立されるなど、美術界では、この戦争をアジア解放のための「聖戦」として位置づけ、「彩管報国」との呼びかけが盛んに行われはじめた。

当時、描かれた題材に関しては、軍人や戦争に関する物を扱った絵が少しずつ出てきたが、日本画では花鳥風月に美人画、風俗画が主流であり、洋画では裸婦、彫刻でも裸像が見られるなど、戦時下とはいえ、まだ、そんなに窮屈なものではなかった。

ただ、日本画と比して洋画の方が、写實的に描く技法に向いているためか、多くの若手洋画家がこの時期から戦争画を描き始めている。陸海軍も作戦記録画を描かせるため、洋画

家を依嘱して中国大陸に派遣し始めた。

また、当時同盟国であったドイツに贈るため、文部省の依頼で横山大観がヒトラーのために絵を描いたり、来日したヒトラーユーゲントたちに「日本美術の精神」と題した講演を行っている。

意外にも、この頃から軍需インフレの波に乗って、日本画の値段が高騰していた事実が見受けられた。昭和13年10月の第2回文展の入選作家の作品の値段が、最低でも1800円、大多数が1,000円、2,000円と記録されていて、橋本明治の作品には5,000円の値段が付いている。

同年、6月に東京美術倶楽部の主催した、本山竹荘還暦記念展では平均3,500円から4,000円、竹内栖鳳、川合玉堂、上村松園らの著名作家は10,000円以上の高額で取引されている。(搭影13年7月号45p)

「軍需成金旅出で、此の頃のデパート展に於ける売約は一人で一万円位の買い上げをしていくお客がざらにあると云う。某デパートで出品中の最高値の絵を売約させて呉れと申込んだお客があると云う」(「都市と芸術」288号12、13p)、同年5月、「京都美術倶楽部の主催した、創立三十周年記念展では、一手に7万円も買い占めた人がいた。」(搭影13年7月号45p)等の話が美術雑誌に掲載されている。

この値段が、どのくらいのものかということ、当時としてはエリートであった大学卒の初任給が70円前後、帝大卒の官僚の35歳時の給料が150円程度という時代だったから、それらが、いかに高額な取引であったかがわかる。

当時の雑誌を見ていく中で、日本画の高値の原因は、美術品の評価が高まったと云うよりは、軍需成金の道楽と、そこにうま味を見つけた画商、骨董商の暗躍によって、値段が高騰したというのが実際の所のようなのだ。

美術展の様相は、デパート展をはじめ、大小の展覧会が数多く開催されていた。昭和13年の第2回文展の東京展入場者数は15万4千人にもなり、さらに大きなものでは、昭和14年7月、第1回聖戦美術展が開かれ日本各地、及び満州、朝鮮まで巡回し、大変な盛況であった。

その当時の美術展の盛況ぶりが、美術雑誌である「都市と芸術」(292号12p)に「展覧会洪水で、人気作家は催促せぬにあつて、大抵病気になっている。第一デパート、画商新聞社、雑誌社等々、毎日五六箇所鉢合わせの展覧だから、気の弱い先生方はテンカンで泡を吹いてしまう始末である」と掲載されている。

昭和15年は、10月、11月に、紀元2600年記念奉祝の美術展覧会が行われるなど、美術界はさらに活況を呈した。この頃の作品のモチーフとしては、裸体画や裸体彫刻は姿を消していき、神代に題材を求めたものや、英雄や忠臣を描くものが増えてきている。また、同年5月、陸軍が「戦争記録画」の作成のため画家を中国大陸へ派遣した。その画家は、中村研一、田村幸之助、小磯良平、田中佐一郎、清水良雄、裕伊之助、伊原宇三郎、橋本八百二、宮本三郎、川端龍子、川崎小虎、吉村忠夫の12名である。

同年7月、「奢侈品等製造販売制限規則」（7・7禁令）が交付されるが、美術品は例外とされる。美術振興調査会第3回総会で、「東亜新秩序建設のための善隣友好のためには美術の振興が必要で『美術品を贅沢とせず』とする」と決定。商工省、文部省の折衝により、制作に必要な金属やカンバスの配給、作品の販売が認められる。ただし、書画骨董の売り上げの1割以上を国債もしくは貯蓄債権の購入に当てる事となる。

10月には大政翼賛会が発足した。はじめ、翼賛会は近衛首相の「昭和研究会」から発足し、軍部勢力を牽制する事が期待された団体だったが、次第に翼賛会内の財界勢力、軍部勢力の発言力が高まり、ついには国民を統制するためだけの団体になってしまった。その流れの中で、美術界も国策に基づいた美術団体の統合が行われていく事となる。工芸界では工芸美術作家協会、洋画壇では美術団体連盟が結成された。

12月には「大政翼賛促進の会」に文壇、画壇などの文化人の代表約700名が出席。段々と国家を総動員しての思想、芸術運動、体制固めのための組織作りが行われていった。

昭和16年7月、「芸術保存のための7・7禁令並びに公定価格制の特例に関する」商工省次官通牒が発令され、「芸術家」の資格を規定する事となった。また、8月、商工省は文展2回以上入選の技術を持つ者に高級工芸品の製造許可を与えるなどの措置をとった。展覧会自体は各地で盛んに行われており入場者も多かった。

昭和10年、帝国美術院の改組に始まって、敗戦に至るまで、美術界の統制を目指す文部省の意向と、それに反対する動き、逆に迎合する動きが見られたが、日中戦争が始まってからは、国策に応じ、各種の美術団体が結成されたり、統合されたりし始める。以下にそれらを列挙する。

昭和10年	5月	文部省が帝国美術院改組を発表
11年	2月	第一回帝国美術院改組展覧会
	6月	帝国美術院会員16名が辞表提出
12年	2月	大日美術院結成
	6月	海洋美術会結成
		帝国美術院開設
	10月	新国画協会結成
13年	4月	日本画院結成
	5月	傷痍軍人慰問美術家連盟結成
	6月	大日本従軍画家協会結成
14年	3月	美術記者連盟結成
	4月	建築美術協会結成
		報道美術協会結成
		陸軍美術協会結成
		工芸輸出美術報国会結成
	6月	戦時下芸術振興の為、文部省が諸学振興委員会内に芸術学部を設置
	10月	美術問題協議会結成
15年	1月	日東美術院結成

- 2月 東洋美術国際研究会結成
- 4月 美術行政の合理化の為、美術振興調査会設置
- 5月 日本産業美術協会結成
- 7月 自由美術家協会が美術作家協会と改称
- 9月 商業美術家協会、図案家協会が統合、新東亜産業美術家連盟結成
- 10月 日本挿絵画家協会結成
国策に沿った大同団結を目的とした工芸美術作家協会結成
- 11月 洋画壇の統合を目的とした美術団体連盟結成
(一水会、二科会、東光会、独立美術協会、旺玄社、太平洋画会、
光風会、春陽会、新制作派協会)
- 12月 海軍従軍美術家倶楽部結成
- 16年 2月 詩人、文芸家、美術家等で国防文化協会結成
大日本海洋美術協会結成
- 3月 彫刻会の合同を目的とし全日本彫刻家連盟結成
- 4月 日本画壇連盟結成
- 6月 南洋美術連盟結成
- 7月 出征帰還芸術家による文化奉公会結成
満州国美術家協会結成
日本美術雑誌会結成 (美術雑誌38紙を8紙に統合)
- 8月 日満支の美術交流の為、大東南宗院結成

以上のように、日中戦争が泥沼に陥り、政府が次第に国内の統制を強めていき、美術界も時代の流れに飲み込まれていった様子が見て取れる。

(3) 太平洋戦争の開戦と敗戦

そして、いよいよ太平洋戦争が始まったが、相変わらず、美術品の値段は向上、特に日本画の値段は高騰している。献納、献金運動はますます盛んになっていった。昭和17年の献納、献金の様子を列举してみると。

- 1月 日本画家連盟600名が2作ずつ制作し海軍部に献納
大阪日本画家報国会300名が軍事保護院に献画
- 2月 西山塾青甲社が海軍記念日に艦名に因んだ作品を献納
竹内栖鳳が陸海軍に1万円ずつ献納
大東南宗院が産業報国会に献納
女流洋画家100名が紀元節に際して海軍省に作品を献納
向井潤吉がフィリピン、バターン半島での戦争画を献納
横山大観、斉藤隆三が陸海軍省にそれぞれ7万5千円を軍用機1機分として献納
京都日本画家連盟の作品800点を陸海軍に慰問献納

- 3月 中京画壇で活動する彩交会が名古屋師団恤兵部に色紙を献納
文展無審査作家、院展、青龍社の作家190名が展覧会作品代20万円を献納
滝野川美術協会が作品を即売、陸海軍省に代金を献納
- 4月 藤田嗣治の「ハルハ河畔皇軍奮闘の図」を遊就館に献納
西山翠嶂、堂本印象、上村松篁、川上拙以が呉海軍人事部に作品献納
福岡美術会が西部軍司令部に作品献納
台湾在住の木下静涯、郭雪湖、野村泉月らが台湾各地の神社に作品献納
- 5月 滝野川美術協会が献納展を実施、売上金を陸海軍に献納
福田翠光が帝展出品の「撃搏」他を鎮守府に献納
- 6月 横山大観が「鹿島洋朝暎」を鹿島神宮に献納
- 7月 日本美術協会の有志が海軍傷痍兵慰問のため35作品を献納
- 8月 荒木十畝が満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に「富嶽」を寄贈
- 9月 東丘社の共同制作「大東亜戦争画」を陸海軍に献納
日本画家報国会、日本美術院が艦上攻撃機、爆撃機を献納
- 10月 帝国芸術院会員28氏の作品を満州建国十周年記念のため寄贈
横山大観が院展出品の「正気放光」を江田島海軍兵学校に献納
- 11月 矢野知道人が「鯉跳る」を靖国神社に献納
- 12月 日本赤十字社が川合玉堂の「揺るぎなき大和島根」を皇太子に献納

これ以降も敗戦まで、献納、献金は行われ、昭和20年6月、「菊池塾、青甲社等、各画塾、及び海軍軍需美術研究所、軍需美術生産隊ら72名が色紙、短冊を制作。特別攻撃隊隊員に献納」との記録がある。

また、国策に迎合した美術団体も数多く結成された。開戦より、敗戦までの流れは以下の通り。

- 昭和17年 3月 日本画家報国会結成
日本画制作資材統制協会設立
- 5月 美術団体連盟が全洋画家を包含する美術家連盟として改称
- 6月 日本自由画壇解散
情報局に大東亜宣伝文化政策委員会設置
- 8月 大東亜美術協会結成
- 11月 共栄圏の文化振興の為、興亜造形文化連盟結成
- 昭和18年 1月 歷程美術協会、明朗美術連盟、美術新協会が合同し日本作家協会結成
- 5月 情報局、文部省、大政翼賛会の支持で日本美術報国会結成、会長は横山大観、日本美術及工芸統制協会結成
- 7月 美術家連盟が美術報国会、美術統制会に発展的解消
- 11月 仏教美術協会設立
- 昭和19年 4月 軍需生産美術推進隊結成
- 8月 大政翼賛会が全国各地に国民美術展示所を設置する事を決定

10月 二科会、旺玄社解散
日本彫刻家協会、日本木彫家協会、直木会、構造社解散
昭和20年 4月 海軍軍需美術研究所設立

10月 日本美術報国会解散
二科会再結成、新日本美術会結成
11月 文展は日展と新発足
行動美術協会結成

また、戦時下ではあったが、多くの美術展が各地で開かれており、入場者も大変な数であった。また、一般の展覧会では戦争画も多く展示されていたが、日本画では人物画や風景、花鳥風月を題材とした作品が相変わらず主流であった。以下に敗戦までの大きな展覧会とその入場者数を列記してみる。

昭和16年10月	「仏印派遣日本美術展」	11万人、会期を延長
17年 1月	「大東亜戦争美術展 大阪展」	26万人
19年 2月	「戦艦献納帝国美術院会員美術展」	15万人
19年 5月	「陸軍美術展 大阪展」	11万人

最終的に昭和19年9月、美術展覧会取扱要項が発表され、公募展の開催を中止、美術報国会の主催、もしくは、共催でなければ展覧会は開けなくなった。10月には、文部省が戦時特別美術展覧会規則を公布した。しかし、「大東亜戦美術展」などの、戦時色の強い美術展は開かれており、結局、小さな美術展は「昭和20年6月、日華倶楽部にて、中西現代名画展開催」「同7月、女流美術家絵画展、浅草本願寺で開催」等、各地で開かれていた。

また、昭和16年、東京において38種類もの美術雑誌が出版されていたが、内務省の統制により、同年6月、「国画」「国民美術」「新美術」「生活美術」「画論」「旬刊美術新聞」「美術文化新聞」「季刊美術」の8紙に統合された。(都市と芸術301号8p)
最終的には昭和19年1月「美術」が創刊され、1誌に統合されてしまう事となる。

昭和17年、物資に対する統制から、表装裂地が全面的販売禁止となるが、3月、日本画制作資材統制協会が設立、商工省から発券団体として公認され、絹地の配給を行う事となる。

しかし、美術界は太平洋戦争緒戦の大勝を受け、大いに盛り上がり、相当数の画家が中国をはじめ、南方の占領地に志願従軍していった。また、陸海軍も多く画家達に依嘱し、マレー、タイ、インドネシア、ビルマ等に画家達を派遣していった。

そのため、戦争画を展示する美術展も多数開催された。例えば、「聖戦美術展」「海洋美術展」「航空美術展」などである。また、10月には「満州建国十周年慶祝献納画展」が行われた。

昭和18年、金属資源の回収の為、銅像や美術品等の回収が始まった。しかし、国内に

において戦況の悪化という雰囲気はまだ無く、実際の戦況もこの時期、アメリカ軍の本格的な反抗がはじまり、日本軍は中部太平洋で一進一退を続けていた時期でもあったから、物資は不足していたとはいえ、日本本土への空爆も未だ行われていない時期でもあり、国民は勝利への希望をまだ失ってはいなかった。

昭和19年、いよいよ戦況の悪化に即し、美術家の疎開が増加し、地方において美術活動が増えるという現象が起こる。また、美術活動を停止して、工場や農村で働く美術家も多くなった。また、団体の解散や展覧会の中止が相次いだ。同年3月、日本美術及工芸統制協会が日本画の資材受給者を査定し、甲種525名（最も資材を多く配給される）、乙種1028名を決定した。

美術雑誌も、用紙の確保が厳しくなり、内務省の統制から、開戦前の8紙が、この年の1月に、「美術」1紙に統合された。その「美術」は最終的に、昭和20年3月号まで発行されている。その号の目次には、「本号に掲載予定の原色版口絵は戦災を蒙り印刷所に於て再び焼失しましたので収載不可能となりました。ご了承願います」と記載され、創刊時と比べると、紙質もかなり悪くなっている。大変な状況の中、懸命に出版していた事がわかる。

また、そんな状況下でも、3,000部の限定ではあるが、「大東亜戦美術 第2号」が出版されている。当時、物不足等からのインフレの為、かなり物価は上昇していたが、値段は78円もするもので、その中の数枚は、カラーで印刷されており、紙質もしっかりした物である。当時としては、かなりの豪華本といえるだろう。発行は昭和20年3月30日であり、沖縄での悲惨な地上戦の行われている中でも、それが発行され、購入者がいたことに、まったく驚きを感じる。

昭和20年、戦況の致命的な悪化の中、それでも各地で美術展は多数、開催されていた。また、敗戦後も9月、京都において「現代美術展」が開催されるなど、社会が大混乱していた時期ではあったが、美術界の動きは案外と速かったと言えるだろう。

日本各地の大都市及び、中小の都市に至るまで、アメリカ軍の空襲により、甚大な被害があったが、例えば東京では、有名な昭和20年3月10日の大空襲があり、10万人とも言われる死者を出したが、2、3日で死体は片付けられ、数日後には、街は整然と機能を取り戻したという。そして、終戦時、240万人が生活しており、当然、焼け残った部分もかなりの面積であった。他の各都市も同じであり、被害は大きかったが、市街のすべてが焼失したわけではなかった。また、京都のように文化財保護の為、空爆の対象から除外されていた都市さえあった。その様な状況から、戦後まもなく、多くの場所で展覧会を開く事は可能であったと考えられる。

*当時の美術界における団体の統廃合、展覧会の入場者数、献納献金の動きに関しては、姫路市立美術館「美術と戦争」2002年の「美術と戦争関連年表」80～98pを参考とした。